

新構想大学の見果てぬ夢のつづき

野田茂徳

哲学・思想学系教授

過ぐる2003年10月に「新構想大学」として創立された筑波大学が30周年を迎えた。

つくば科学万国博覧会が開催された1985年までは大学をはじめ研究学園都市全体の環境整備が未完成であった。市内の至る所で道路や建物の建設が進んでいた。今日「つくばエクスプレス」の地下駅建設が進んでいる一帯にその小さな面影が残ってはいるが、その規模とエネルギーは比べものにはならない。

ところで私が筑波大学の教員に就任したのは1976年だった。当時の大学本部は体芸棟にあり、総合科目に使う大教室は体芸棟であり、教育・研究・情報の中心地は体芸地区にあった。教職員も少数で毎日構内で会っている内にお互いに親しい感じになっていた。教員会議や各種委員会も教員の人数が少ないために分担しあっても毎週なにかの委員会に出席していた。そうすると北は農林3学系から南は医学3学系まで、

つまり全学系の教員たちと会うことになったのである。教育・研究に関わるすべての会議が建学の理念を実現するためにすべて手作りではじめるという意気込みであった。つまり「新構想大学」というのは既製のものがない故に誰もが創造的にひとつひとつ課題に向かい合っていた。

過去のを模倣するのではなく、いつも新しく建学の理念にそって創造してゆくことが求められていた。

筑波大学は南北に長いキャンパスがあり、教員はそれぞれの研究棟に閉じこもっていれば学科講座制の既存の大学と何ら変わらない。ところが、教育・研究に関わる（もちろんその中には学生の研究指導や生活指導・相談も含む）委員会で全学的に交わる機会があったからこそ、ひとつの事柄を個別問題として考えるだけでなく、全学的な視点で考えることができた。

当時はすでに述べたように教員は一人

で何役も勤めなければならない役割があった。だから委員会では講師であろうが、助教授であろうか教授と対等に議論できなければならなかった。黙っていて会議が終わるものではなかった。そのために会議が終わっても「新構想大学」の理念を大学の隅々まで拡充し実現するためにはどのように各自が実行するのかが求められていた。求められていたといっても、誰かがそのようなことを言ったのではなく、むしろ各自が新構想大学の理念を実現する使命感に燃えていたといったほうがふさわしい。たとえば教育と研究の現場における縦割りすなわち「分割統治」とでも言うべき学科講座制を廃止しただけでも、筑波大学の存在は大きなインパクトを全国の大学に与えていた。

「新構想大学」にふさわしい教育・研究における環境づくりは毎日毎日が新しい創造であったように思えた。たとえば、哲学・思想、歴史・人類、文芸・言語、現代語・現代文化の文系4学系の教員と学類教員会議をとおして交流するだけではなく、新構想大学の中で第二学群の「比較文化学類」は学部レベルで学際研究の成果を反映させねばならない課題があり、講義時間外に4学系の有志による研究会を続けていった。その時の研究成果の一部は「比較文化・比較思想叢書」として国書刊行会から出版した。研究分野を超えた教員たちが自主的に

集まりひとつのテーマを研究するという形式の研究会を継続して、いくつも開催できたり参加できたことは筑波大学で受けた恩恵のひとつであり喜びでもあった。

研究会は全学的に盛んであったが、私が参加したり立ち上げたものはそれなりの評判になり、学系も文科系、社会科学系だけではなく農林3学系をはじめ芸術学系、教育学系からの参加者で盛んになっていった。

研究会は真夜中まで続くことが度々あった。

「農林3学系の先生方は朝が早いです」と評判には聞いていたが、ある先生は「朝6時には研究室で仕事に取り掛かっているので、いつでもおいでください」と言われた。それで毎週1回朝、講義前に研究会をしたらどうだろうかと提案したら即座に賛同してもらい「私は6時には無理ですが今後研究会の日には朝7時前には研究室に居ます」と約束してしまった。あの当時は、早朝から真夜中まで大学で過ごしていた。毎日講義、委員会、研究会が続いてあった。それゆえに一瞬の時間も惜しんで、資料を読んだり論文を書いていた。忙しい感じはしていたが、教授や助手諸君まで活発な議論ができて楽しい時期であった。

附属病院が出来てまもなく、まだ病室が空いている頃共済組員は附属病院で「人

間ドック」に入ることになった。私が胃のレントゲン検診を受けている時、若い医師がマイクロホーンを使って「これはひどい痛だ」と言うのを聞かされた。当時30代後半であった。「痛」だと言われたのにはこたえた。数週間後、小宮正文病院長署名で「異常なし」という「人間ドック」報告書が送られてきた。私は、直接病院長に電話して、人間ドックのときの医師の対応と「異常なし」とは矛盾があることを指摘し、医師の説明はあれでよかったのか再調査を依頼した。病院長からは即座に念のためレントゲンフィルムを自分で調べた結果「異常ございませんでした。しかし、念のため名医の大菅俊明助教授に診察してもらおうようにしますが、ご都合はいかがでしょうか」という回答が来た。再診をお願いした大菅先生はお会いするなり「自分では自分の胃を見たことがないのです。古い心の傷が見えるようで」と言われた。その一言を聞いて名医だと感じるものがあった。問診だけではなく内視鏡検査でも「異常なし」と言う結果が出た。それではあのマイクロホーンを通して「これはひどい痛だ」といったあの医師はの発言はなんだったのか、疑問が残ったままだった。附属病院ではその後も不祥事が起きていることがマスコミによって「報道」された。一方で、附属病院には名医たちがいることも事実である。すぐれた

看護師をはじめ人知れず巨大組織を支えている多くの優秀なスタッフがいて成り立っているのである。医療は間違いが許されなだけに精神的ストレスがたまるのであろうが、ドイツの医師にして医学教育者だったフーヘランドが言うように「医師とは他者のために命を捧げる人」という原点に戻れば、医師という仕事を選択するということはどのようなことか自ずと決まってくるものであろう。

新構想大学の理念のひとつに「開かれた大学」ということがある。「公開講座」はわかりやすい形で地域住民に「公開」の意味を示しているひとつである。しかし、地域住民にとっては筑波大学は見えてはいてもなかなか到達しがたいカフカの「城」なのである。地域住民の方に大学の方から近づかない限り「公開」とはいつでも無理がある。公開の恩恵に与るのは「新住民」といわれる研究学園都市に移住してきた住民が大半である。そうしたことは、私は筑波大学着任早々「旧住民」の会合に呼ばれ、肌身でその感覚を感じていた。また今は亡き農業経済学者の山下雄三教授が地元の農業生産者との交流で知りえた地元の生活者の声を伝えてくれた。

山下教授と私はつくば科学万国博覧会に会場の地元でもあった谷田部町婦人会から

茨城県展示館に出品する企画について相談を受けたので、婦人会と研究会を立ち上げて「女が使う火と水」をテーマにして近現代の地元の女性の生活史を勉強し、展示作品は「台所・厨房を舞台にした女性の生活史」を展示できた。

1989年に大学に隣接した場所に茨城県立つくば看護専門学校が出来た。設立は茨城県ではあるが講師の派遣では筑波大学が協力し、専任の看護学の教員は財団法人メディカルセンター病院の看護師があたることになっていた。看護教育は地元の医療体制を充実させるために重要なものであり、医療の中で看護が占める割合は90パーセントといわれるにもかかわらず、残念なことに未だ社会的共通理解は得られていない。つくば看護専門学校の筑波大学側協力は医学をはじめ基礎科目・共通科目の講師の派遣であるがその準備に澤口重徳医療担当副学長があたられ、私は旧知の澤口先生の要請もあり今日まで「哲学」の講義を担当してきた。また、茨城県厚生連土浦協同病院附属看護専門学校でも論理的思考ができて、しっかりした医療の倫理を学ばせたいという要請がありこれも地元住民の医療環境の向上に結びつけばありがたいことだと思い哲学関連科目の講義を継続してきた。

大学における学群学生、大学院博士課程学生に対する講義、研究指導に加え地元の

地域住民や学校で教えることができたことで建学の理念の如何ばかりかを展開できたのではないと思う。

過ぎてみればこの28年間はあっという間の出来事であった。しかしその28年間は<現在>につながった時間である。

大学創立10周年を祝賀した時代までは、大学は建学の理念がすべてに優先してその実行実現のために一丸となっていた時代であったように思う。講師も助教授も教授も一人一人が自分の頭で考え発言しなければ意味のない時代であった。会議も中身の議論に時間をかけていた。結論があらかじめ用意されていても、議論に耐えられなければ意味がないものであった。学長、副学長、病院長であろうが「いつでもどこでも」直接対話できる時代であった。

昨今の大学院の編成過程を見ているとそうした内容の議論がなされていないまま、「上の方の意思」とか「文部科学省の意向」とかいう説明で議論がないに等しい状態で再編が行なわれたのは、議論を大事にした20年前の事が隔世の感がある。過去のことは新しいものを創造していく過程で参考にはならないかもしれないが、「新構想大学」であった筑波大学は創造的であるが故に他大学から模倣されることはあっても、一人一人が創造的であることを止めてしまっ

は力を失っていくことになるであろう。大学人は何事もあらかじめ判断を「一任」することを前提にするのではなく、一人一人が自らの言葉を持って発言することが大事なことだ。大学院大学の方に日本中の大学が目を向け、切磋琢磨していくことは大事な事柄ではある。しかし連携・連合大学院

を充実しエネルギーの無駄づかいをしないことも大切だと思う。否、現在もっとも大事なのは、優秀な大学院生を生み出すためにも大学院の充実よりも学群・学類レベルの教育を充実することではなかろうか。

(のだ しげのり／哲学・比較思想学)

